

伊藤栄樹



検事総長の回想

秋霜烈日

伊藤栄樹

秋霜烈日

校事総長の回想

朝日新聞社

伊藤栄樹 いとう・しげき

1925(大正14)年名古屋市生まれ。旧制愛知一中、第八高等学校を卒業、1943(昭和18)年に東京帝国大学法学部入学。翌年、最後の学徒出陣で海軍見習主計尉官として海軍経理学校へ。戦後復学して1947年に東京大学卒。1949年、戦後の一期生として検事に任官。横浜地検在任中の1952年、堀尾康子と結婚。翌年、長女由美子出生。1959年、次女由紀子出生。東京地検検事、法務省刑事局参事官、刑事課長、総務課長、人事課長などを経て1972年に東京地検次席検事に就任。以後、法務省刑事局長、法務事務次官、最高検次長検事、東京高検検事長と法務・検察の主要ポストを歴任、1985年12月、検事総長に就任。身体かかんに冒されていることを知って1988年3月に退官。病床にありながらも本書回想録の執筆を続けたが、同年5月25日、盲腸がんとがん性腹膜炎のため死去。享年63。著書に「新版検察庁法逐条解説」「おかしな条例」「たまされる検事」「またたまされる検事」「刑事訴訟法の実際問題」など。

秋霜烈日——検事総長の回想

1988年7月10日第1刷発行

定価1000円

著者 伊藤栄樹

発行者 八尋舜右

印刷所 凸版印刷

製本所

発行所 朝日新聞社

編集・図書編集室／販売・出版販売部

東京都中央区5-3-2 〒104-11

電話 03-545 0131(代表)

振替 東京0-1730

©YASUKO ITO 1988

Printed in Japan

ISBN4-02-255881-4

秋霜烈日・目次

まえがき 5

秋霜烈日 13

造船疑獄事件 1 土光さんのこと 15

造船疑獄事件 2 ひょうたんから駒 20

造船疑獄事件 3 赤坂芸者 25

造船疑獄事件 4 指揮権発動 30

造船疑獄事件 5 検事総長の進退 35

武装ギャング団事件 一度だけのうそ 40

船上密室殺人事件 「死刑」 求刑 45

海上保安庁汚職事件 汚職・会社犯罪専門検事 50

造船疑獄事件・補遺 昭和維新の歌 55

日興連汚職事件 斜めの議事堂 59

テーブル・ファイヤー事件 保険会社が保険金詐欺 64

警視庁防犯課汚職事件 警部補の自白 69

売春汚職事件	赤煉瓦へのガセネタ	74
東洋精糖事件	隠し預金口座	80
富山水道汚職事件	名乗れぬ再会	85
鮎川派選挙違反事件	鬼の目の涙	90
交通切符制度の創設	遅刻防止ルール	95
裁判所・検察庁の統廃合	庁舎は元豚小屋	100
「松本楼」放火事件	窓からのスナップ	105
日活ロマン・ポルノ事件	「わいせつ」の概念	110
トイレット・ペーパー事件	「勉強会」の威力	115
運転免許のこと	北海道での冒険	120
連続企業爆破事件1	確信犯の自白	125
連続企業爆破事件2	天皇特別列車爆破計画	130
ハイジャック事件	超法規的措施	135
ダグラス・グラマン事件	国会答弁	140

ロッキード事件 アリバイ崩し 145

捜査余話 証拠と鑑定、自白と記録 150

検察の限界1 国会議員と政黨員 158

検察の限界2 おとぎ話 163

終章 がん和私 168

海外司法事情報告 173

北欧所見 175

西ドイツ連邦司法省訪問とその前後 189

刑事局長ジロラモ・タルタリオーネ氏 197

日本法務・検察代表団訪中記 205

あとがき 228

まえがき

三月二十四日、四十年勤めた役所を退官し、必要最少限度の挨拶回りをすませて、さああとは、生活の半分を病気の治療にあてるとして、残り半分は何をしようか、さしあたりこれといった考えもないといった中途半端な状態で、病院のベッドにひっくり返って、天井を眺めている。そういった「絶妙のタイミング」に、絶妙の人物が病院へ現れた。

私は、昭和二十八年に初めて官舎を頂戴した。東京・杉並区方南町の小さな木造一家建てである。すぐ近所に、当時最高検総務部長の中村哲夫さんの官舎もあり、かわいいお嬢さんが四人おられた。やがて、上のお嬢さんは、判事の千種君（法務省出向が長く、何かとお世話になった）と結婚され、いちばん下のお嬢さんは、朝日新聞の若手記者阿部純和記者と結婚された。同君は、私が東京地検次席検事の頃、司法記者クラブに詰めており、親交を深めることになった。絶妙のタイミングで現れたのは、今や社会部次長、司法記者クラブの朝日新聞キャップとなった同君であった。

過去四十年間の回想のようなものを新聞朝刊連載三十回くらいにまとめて書けという。しばらく目をつむって、振り返ってみる。東京での検事一年生、横浜での二年生、それぞれに私にとっては珍しい「強力犯」の思い出がある。また、横浜時代には、知能犯専門検

事への第一歩を踏み出した海上保安庁汚職事件がある。七年間の特捜検事時代には、造船疑獄事件について五、六回は書くことがあろうし、その他一年に一件くらいの割合では、面白い事件を取り扱っているように思う。法務省刑事局の局付、参事官、刑事局長、総務課長時代には、交通切符を「発明」したり、区検察庁の統廃合に努めたりしたものだ。その後の人事課長時代には、仕事の性質上秘密事項が多く、書ける話題に乏しいが、会計課長時代ならい、いくらか話題がありそうだ。その後は、東京地検次席検事、最高検検事、刑事局長、事務次官、次長検事、東京高検検事長、検事総長と累進していくことになるが、それぞれのポストについてひとつづつくらいの話題は提供してくれるだろう。よし、不思議なご縁でこういうことになったからには、お引き受けることにしようと思ひ、その旨お返事したのであった。

その結果、五月四日から朝日新聞朝刊に掲載された文章が、本書の第一部をなしている。第二部は、役人生活の間に、海外出張の際の印象を活字にしたものがあるので、この際収録させてもらった。妻へのはなむけのようなつもりである。役人を辞めたら、長年苦勞ばかりかけてきた妻へのせめてもの罪ほろぼしに、外国旅行にでも引っぱり出そうと思っ

ていたのが、私の病気でだめになってしまった。私の過去の旅行記では仕方がないが、せめてこれでも読んでくれたまえ。

新聞連載が実現し、本書が世に送られることになるについては、すでに記したような阿部君のお骨折りがあったほか、その前任者高木敏行君、それに、執筆にあたって精力的に資料集めなどをして下さった沖浩記者にすっかりお世話になった。この際、お礼を申し上げておく。

昭和六十三年五月

伊藤 栄樹

この原稿は伊藤氏が生前に執筆、家族に託していたものです。



検事総長退任、退官の記者会見の日の伊藤栄樹氏（昭和63年3月）

秋霜烈日

秋霜烈日

「しゅうそうれつじつ」と読む。秋におりる霜と夏の激しい日差しのこと、刑罰や志操の厳しさにたとえられる。検事のバッジの形は昭和二十五年の法務総裁訓令で「紅色の旭日の周囲に白色の菊花弁十二弁及び金色の菊葉四葉を配する」とされている（カバールの記章）。しかし、霜と日差しを組み合わせた形に似ていることと、厳正さを求められる検事の理想像とが重なり合い、「秋霜烈日のバッジ」ともいわれるようになった。

秋霜烈日

